HOW別冊
特別企画
座談会

“みんなで話そう! わたしたちの未来”

―― 子育てと仕事の関係を考える ――

就職活動目前の学生が企業に望むことは?
家庭と両立させながら働く社会人は、自分のキャリアプランをどう考えている?
今回は東大阪市立男女共同参画センター「イコーラム」ディレクターの筒井清子さんをコーディネーターに迎え、
地元・東大阪で学ぶ学生たちと、東大阪市内に拠点を置く企業で活躍中の社会人の先輩たちが一緒になって、
「子育てと仕事の良い関係」について語り合っていただきました。

【出席者のみなさん(敬称略・50音順)】
ハウス食品株式会社
　広報室　お客様相談センター　大井　明子
　人事部　人事企画課　福島　宏行
　イデアックセンター　油谷　朝子
大阪樟蔭女子大学
　学芸学部日本文化史学科3年　大橋　亜季子
　学芸学部日本文化史学科2年　日野　美香
　学芸学部日本文化史学科2年　廣崎　朋
　(学年は2007年3月現在)
【コーディネーター】
東大阪市立男女共同参画センター
　ディレクター　筒井　清子

わたしたちが企業に望むこと、企業がわたしたちに望むこと。

筒井▶学生のみなさんはこれから就職活動を控えているわけですが、将来はどういうところを就職先として希望していますか?
大橋▶私は公務員になりたいと考えています。公務員は女性も男性と同様に活躍でき、育児休業制度なども整っていると聞いたので。結婚しても子どもができても仕事を辞めずに続けていきたいですし、できれば夫にも育児休暇を取ってもらって、育児や家事を一緒にやっていきたいと思っているんです。

日野▶私は、大企業ではなく個人事務所のような小規模な組織で働きたいと思っています。そのほうが、子どもの行事などがある時に休みを取りやすいなど、融通が利きやすそうかなと思ったので。
廣崎▶今、大学で図書館司書の勉強をしているので、司書として公立の図書館や博物館、美術館、大学図書館などで働きたいです。
筒井▶あら、企業に行きたいという方がいませんね。ハウス食品さんを前に、聞きづらいですが(笑)。
福島▶いきなりショッキングな答えが返ってきましたね(笑)。なぜ企業ではダメなのかということには、たぶんいろいろな理由があると思いますが、皆さんが企業に対して、どのようなマイナスイメージを持たれているのか、逆にお伺いしてみたいですね。
大橋▶私は自分の能力をちゃんと発揮したいと思うので、もし企業に行くとしても、女性がお茶くみや雑用係として扱われるのではなく、きちんと能力を活用してくれるところに行きたいと思っています。
日野▶結婚したから、子どもができたから退職してくれという会社ではなく、結婚・出産を経験してからも、ずっと続けられるような会社で仕事をしたいです。
廣崎▶私も結婚してからもずっと働きたいので、そういう職種がいいと思います。取り入れられるかどうかは別として、まずはきちんと自分の意見を出せるような職場がいいですね。

油谷▶少し前までは、組織で長く働いていると、このまま無難にやっていければいいとか、言われたことさえやっていればそれでいい、という風潮は、女性に限らず多かったですよね。でもそれだけでは、つまらない。やはり自分のやりたいことをもっと上司に言える立場になりたいし、自分がどんなふうに貢献できるのかも考えていきたい。そこでまず、社内で長く働いている人たちにスポットを当て、そういう人たちが変わることによって、それに続く後輩の人たちも、頑張って会社をつくっていくんだ、という機運を高めようというところで、大井さんが印象深かったと言っていた「LL制度(※P.2参照)」という資格が登場したんです。
大井▶上司や男性社員って、女性社員に優しかったんですよ、あまり叱らない。でも、それはつまり「期待されていない」ということでもあったわけで、一人前の仕事をする人として扱われるためには、間違ったところがあれば上司はきちんと「違うよ」と指摘し、本人も指摘されたことに対して感情的になったり泣いたりしない。仕事の中では厳しいこともあるんだよ、と教えられたのは印象的でした。今となっては当たり前のことなんですが。
福島▶研修対象となるのは上司の推薦を受けてきたような人たちなので、職場の女性たちの中ではリーダー的存在の人も多く集まるわけです。今まで自分はけっこうできていると思っていたのに、講師の厳しい指導を受けて、それは衝撃を受ける。自分が思っている以上に、期待されているハードルは高いんだと。
筒井▶LL制度が97年で終わったということは、その後は男女とも共通の能力基準でいけばいい、ということですか。女性も男性と同じラインに立ち、あえて別の資格を設ける必要はない、と。
福島▶そうですね、当初の趣旨は一応達成できた、そういう土壌はできたと認識しています。もちろん、もうこれで充分、とはまだまだ思っておりませんが。

子育ても働くことも、自分を成長させることも楽しみたい。

大橋▶大井さんはお子さんが2人いらっしゃるということですが、育児休暇は取得されましたか?
大井▶1人目は取得せず、2人目で2ヵ月間だけ取りました。1人目の時は、希望していた広報部門に異動したばかりだったので、長期間離れると元の部署に戻れなくなってしまうのではないかと思い込んでしまって。2人目の時も、上司や同僚の理解や協力があったので、1年でも休めたのですが、4人ほどの小さな部署に所属していたこともあり、すぐに戻りたいというのが私自身の希望だったんです。育児休暇を取得された先輩に相談したら、やはり子どもはすごくかわいい、離れたくなくなる、とおっしゃって。それを聞いて、1年間も子どもといたら仕事に戻りたくなくなってしまうんじゃないかと思ったんですね。でも今は、育休中にもスキルを磨いたり、元の職場とつながりを持ち続けることのできる制度がありますから、何の心配もなくゆっくり育休を取って、子どもとの時間を大切にしてからの復帰も充分可能です。
油谷▶学生のみなさんは、ご両親や先輩の方を通して、仕事のことや、働くことについて、どんなふうに思われているのでしょうか。
筒井▶働くということが、一生の中でどういう位置づけになっているんでしょう。女性の場合、特に出産・育児と密接に絡み合ってきたりするのですが。
大橋▶私は家庭と仕事を両立させたいと思っています。将来は子どももほしいし、どっちも大事にしたいです。
筒井▶将来結婚したいし、仕事もしたいし、子どももほしい。それはそうですよね。働き出すといろいろと条件が変わってくるので、その時々で考えることは違ってくるかとは思いますが、今そう思ってらっしゃるのなら、ぜひそれを貫いてほしい。仕事を途中で辞めるというのは、やはり大きな損失になりますし。ところで、専業主婦になってみたい、という気持ちはありますか?
廣崎▶あまりないですね。家庭ももちろん大切ですが、外に出て、違う空気も吸いたい。働いていたらいろんな人と出会えて、いろんな人の話を聞ける、というのが一番ですね。
日野▶働いていると毎日何かしら変化があるので、自分が成長できるような変化をずっと感じていたい。働くことを楽しみにしていきたい。私もすべてを両立させたいので、夫にも家事を分担してもらって、一緒にやっていきたいです。
筒井▶夫にも、というのが今、出てきましたね。夫婦が共に働いている場合は、やはり育児や家事に、男性の参加がなかったらやっていけないと思うんですね。大井さんのところは協力的ですか?
大井▶そうですね、そういうふうに私が教育しました(笑)。まあ、最初から協力的ではありましたが。周囲もみんな理解してくれていたので私などは恵まれていると思いますね。こうしてほしい、ということは夫にハッキリ言って、それが自然という感じになってきたらいいのかなと。すると子どもたちもそれが当たり前になってきて、「お母さんがいないから寂しい」などと言われたことはありません。親が働くということを、子どもたちなりに自然に受けとめている気がします。
筒井▶これから働いていく上で、社会全般がこうなってくれたらいいな、というのはありますか。

廣崎▶法律があるから制度を整えるのではなく、法律がなくても、働く人が快適に仕事しやすいような制度をつくっていく会社が増えたらいいなと思います。
日野▶子どもを無理なく育てられるような社会になってほしいので、経済的な不安から子どもを産めないとか、そういう心配をせず産みたいだけ産める社会であってほしいです。

大橋▶私の父もそうなんですが、仕事が忙しくて、本当はもっと家庭に関わりたいのになかなかできない男性が多いと聞きます。男性も積極的に、子育てや家事に参加できるような社会になってほしいですね。
福島▶採用面接業務で毎回いろんな学生の方とお会いしていると、女性の学生さんがすごくしっかりして見えることが多いんです。それはなぜかと考えると、女性の場合は結婚・出産・育児といろいろなライフイベントの時にキャリアをどうしていこうかということをけっこう早くから考えていて、そういうタイムスケジュールの中でどんな仕事をしていきたいかを、明確に持っている人が多いんですね。その点では女性のほうが、すごくしっかり自分のキャリアについて考えを持っている人が多いと感じます。ただ、就職してみると実際の会社では全員が思い通りのキャリアを歩めるわけでもなく、いろんな予期せぬハプニングの連続になるわけですから、そういった意味では、これから就職活動をされる方は、より大きな視野を持って自分の価値観を大切にされたらいいと思います。結局、自分がどうありたいかを考えることが重要なんですよね。
筒井▶自分自身の価値観をしっかり持って、職業を選んでもらいたいということですね。本日はみなさん、ありがとうございました。

座談会を終えて

以前なら、女性は出産・育児でいったん仕事を辞め、一段落したらパートという働き方が一般的とされ、「専業主婦になりたい」という女子学生が多かったのですが、最近は男女ともに意識が変化してきて、ずっと働き続けるほうがいい、という人が増えています。今回、若い学生の方々からも「家庭と両立させて仕事を続けたい」という希望が出てきたのは、頼もしい限りですね。女性の活用に関する行動計画策定に関わっていると、「それをやってどんなメリットがあるのか」とよく企業側に訊かれます。ハウス食品さんの場合は食品メーカーなので、購買層の中心となる女性の視点を大切にし、商品開発などに生かせるということはもちろんあると思います。が、それ以外にも、優秀な人材の確保、企業イメージの向上、そして将来の雇用や消費につなげるという意味でも、中長期的に見ればメリットは計り知れません。ハウス食品さんは「次世代育成支援対策推進法」に基づく認定マークの取得申請予定ですが、それは、育児支援や女性の活用に積極的な企業であるというひとつの指標になりますので、申請する企業がもっと増えていってほしいですね。(筒井)